

「土木」と「Civil Engineer」の概念と語義の変遷(2014年9月10日)

世紀	記述年・史料		注釈
	日本の動き	中国・欧米の動き	
前5世紀	〔春秋〕「 国語・晋語九 」“今 土木 勝，臣懼其不安人也” 〔春秋〕「 列子・天瑞 」“夫禾稼、 土木 、禽獸、魚鱉，皆天之所生”		「大漢和辞典」へ 「大漢和辞典」へ
前2世紀	〔前漢〕「 淮南子 」“聖人乃作、為之 築土構木 、以為宮室”		「漢和大事典」へ
5世紀	〔宋〕「 後漢書・郎顗襄楷列傳 」“而皆務精 土木 、營建無已” 〔宋〕「 世說新語・容止 」“而悠悠忽忽， 土木形骸 ”		「大漢和辞典」へ (美男の形容)
7世紀	〔飛鳥〕646年：大化の改新―― 〔唐〕659年：「 北史・齊本紀中第七 」“ 土木 營造金銅鐵諸雜作工、一切停罷” 〔唐〕「 晉書・嵇康伝 」“而 土木形骸 ，不自藻飾”		「大漢和辞典」へ 「漢和大事典」(誤)へ
8世紀	〔奈良〕720年：「 日本書紀 」冒頭に“清陽者薄靡而為天～故天先成而地後定。”「 淮南子 」と同一修辭 〔平安〕795年：「 日本後紀 」“盡 土木 妙製、裝鏤伽藍”		日本「 土木 」初出
9世紀	〔平安〕846年：「 續日本後紀 」“爾乃 土木 之細工終焉” 〔唐〕「 中書直宿(白居易) 」“自嫌野物將何用， 土木形骸 麤鹿心” 〔唐〕815年：「 重題(白居易) 」“豈止 形骸同土木 、兼將壽夭任乾坤” 〔平安〕876年：「 日本三代實錄 」“始作大極殿、 土木 工夫並從事”		
10世紀	〔平安〕914年：「 意見十二箇條 」“皆究 土木 之巧”		
11世紀	〔平安〕1002年：「 權記(藤原行成) 」“仍營造之間、重制過差、不費 土木 之功力、可減柱梁之高大” 〔北宋〕1060年：「 唐書・百官志 」“工部郎中、員外郎各一人、掌城池 土木 之工役程式” 〔平安〕1066年頃：「 明衡往来(藤原明衡) 」“多有態軾之望、仍致 土木 之功、可期刺史之運也”		「日本国語大辞典」へ 「大言海」へ 初の往来物(教科書)
12世紀	〔平安〕1149年：「 兵範記(平信範) 」“去夏企 土木 、其巧速終、今日被逐供養也” 〔平安〕1165年頃：〔辞〕「 色葉字類抄 」“ 土木 技芸 トホク 工匠 又造作名也”		「日本国語大辞典」へ 「日本国語大辞典」へ
13世紀	〔鎌倉〕1212年：「 方丈記(鴨長明) 」“ 土木 のわづらひあることをなげく” 〔鎌倉〕1231～53年：「 正法眼蔵(道元) 」行持下“難艸すみやかならず、 土木 いとなまず” 〔鎌倉〕1250年頃：「 源平盛衰記 」“されば天平十七年に 土木 の造縁を始られしに”		初の漢字仮名交じり文 「日本国語大辞典」へ
14世紀	〔鎌倉〕1300年頃：「 吾妻鏡 」“可早結縁助成善光寺造營間 土木 人夫事”“於勸進上人 土木 之間、勵出人夫” “採料材、致柱礎、構企 土木 功”“其以前難終 土木 之功”“縱雖終 土木 、莊嚴、不可出來五月者每事忌來敷”“早召損色、可成 土木 之功之由” 〔室町〕1376年：「 空華日用工夫略集(義堂周信) 」“暫停它寺社 土木 事”		
15世紀			
16世紀	〔室町〕1546年頃：「 大観本謡曲・谷行 」“谷行に飛びかけて、上に蓋へる 土木 盤石、押し倒し取り払って”		「日本国語大辞典」へ
17世紀			
18世紀	〔江戸・宝永〕1709年：「 曾我扇八景(近松門左衛門) 」“内に 土木 の気を養ひて、外青黄の色なく” 〔仏国〕1716年：「 土木技師団 」“Corps des Ponts et Chaussées”創立 〔江戸・享保〕1729年：「 経済録(太宰春台) 」“ 土木 トハ、今ノ世ニイフ普請、造作ノト也” 〔仏国〕1747年：「 国立土木学校 」“École Nationale des Ponts et Chaussées”創立 ――〔英国〕1760年頃：産業革命 〔英国〕1763年：ジョン・スミートン(John Smeaton)、人名録に“Civil Engineer”と記載 〔英国〕1771年：“Society of Civil Engineers”創立		「大日本国語辞典」へ 「非軍事工学」として 中国の官職「司空」を記述 「職業」として明示
19世紀	〔英国〕1818年“Institution of Civil Engineers”創立 〔米国〕1828年：〔辞〕Webster辞書に“Civil Engineers” ※右表に 〔米国〕1852年“American Society of Civil Engineers”創立 〔英国〕1855～1882年：〔辞〕Webster辞書を増補したImperial辞書に“Civil Engineers”詳細説明 ※右表に 〔江戸・万延〕1860年：「 武家名目抄(塙保己一) 」作事奉行、普請奉行等に“ 土木 のこと”“ 土木 の役” 〔江戸・慶應〕1866年：「 常陸帯(藤田東湖) 」“折シモ小石川ノ屋形新タニ 土木 ノ事有テ” 〔慶應3年12月〕1868年：王政復古の大号令―― 〔慶應4年6月〕1868年：〔辞〕「 新令字解(荻田嘯) 」“ 土木 (トボク) フシヲスルコト” 〔明治元年〕1868年：〔辞〕「 日誌必用御布令字引(四方茂平) 」“ 土木 (トボク)ヲ運(ハコブ) フシヲスルコト” 〔明治2年〕1869年：民部官職制「 土木司 」“道路橋梁堤防等営作ノ事ヲ専管スルヲ掌ル” 〔明治6年〕1873年：〔辞〕「 附音挿図英和字彙(柴田昌吉) 」“Civil engineer 土木 (トボク)方” 〔明治8年〕1875年：「 近世紀聞(染崎延房) 」“貴族のおん身にて 土木 と共に朽果てんとは” 〔明治12年〕1879年：工部大学校第1期卒業生(土木 ・電気・機械・造家・化学・鉱山・冶金)が工学会創立 〔明治19年〕1886年：「 工学字彙(野村龍太郎) 」“Civil engineer 土木 工師、Civil engineering 土木 工学” 〔明治21年〕1888年：〔辞〕「 漢英対照いろは辞典(高橋五郎) 」“ 土木 、工事、ふしん Works, public works.” 〔明治24年〕1891年：〔辞〕「 言海(大槻文彦) 」“トボク 土木 普請。作事。”		「非軍事」を明示 「工種」の列挙 「日本国語大辞典」へ 初の本格的国語辞典
20世紀	〔明治36年〕1903年：〔辞〕「 漢和大事典(重野安綱) 」“1. つちときと。【 土木形體 】 2. 建築。【 築土構木 】” 〔明治40年〕1907年：「 虞美人草(夏目漱石) 」“音なくして寂定裏に 形骸 を 土木 視して” 〔大正3年〕1914年： 土木学会 創立 〔大正8年〕1919年：〔辞〕「 大日本国語辞典(松井簡治) 」“1. つちと木と。【曾我扇八景上「内に 土木 の気を養ひて、外青黄の色なく】 2. 道路・堤防・鉄道・橋梁等に関する工事。土木工事。” 〔昭和10年〕1935年：〔辞〕「 大言海(大槻文彦) 」“1. つちと、きと。【曾我扇八景(寛永、近松作)上「内に 土木 の気を養ひて、外、青黄の色なく】 2. 堤防、溝渠、道、橋ナドノ普請。作事。【唐書、百官志「工部郎中員外郎各一人、掌城地 土木 之工役」】 3. 身ナリヲ飾ラザルコト。粗野。【晋書、嵇康伝「 土木形骸 、不自藻飾」】” 〔平成11年〕1999年：〔辞〕「 土木用語大辞典(土木学会編) 」 土木 という言葉の語源を記述 ※右表に		初の本格的漢和辞典 「言海」「漢和大事典」所蔵
21世紀	〔平成14年〕2002年：新土木図書館・会館記念式典で丹保憲仁会長が「 土木 の語源は 築土構木 」 ※右表に 〔平成14年〕2002年：〔辞〕「 日本国語大辞典(松井栄一) 」※右表に 〔平成26年〕2014年： 土木学会 100周年		

Noah Webster, *An American dictionary of the English language*, 1828

ENGINEER, n. [Fr. *ingenieur*.] In the military art, a person skilled in mathematics and mechanics, who forms plans of works for offense or defense, and marks out the ground for fortifications. Engineers are also employed in delineating plans and superintending the construction of other public works, as aqueducts and canals. The latter are called civil engineers.

2. One who manages engines or artillery.

John Ogilvie, The imperial dictionary of the English language, 1855, 1882

Engineer (en-jin-er), n. [Formed on type of charioteer, musketeer, &c.] 1. A person skilled in the principles and practice of engineering, either civil or military. Military engineers form plans of works for offence or defence, and mark out the ground for fortifications. Engineers are also employed in delineating plans and superintending the construction of other public works, as the formation of roads and railways, the raising of embankments, mining operations, the formation of docks or artificial harbours, aqueducts, and canals. The latter are called civil engineers. A mechanical engineer practises the avocation of the machinist, in executing the presses, mills, looms, and other great machines employed in the arts and manufactures, particularly in constructing steam-engines, and the apparatus by which they are rendered available for giving motion to ships, carriages, or machinery.--2. One who manages military engines or artillery. [This is the spelling of *engineer* in the later folios and some manuscript editions of *Shakspeare*.]--3. And *engine-driver*: one who manages an engine; a person who attends to the machinery on board a steam-vessel.--4. One who carries through any scheme or enterprise by skill or artful contrivance: a manager.

土木用語大辞典(土木学会編、1999年2月、技報堂出版)

土木 土木という言葉の語源は中国にあるが、諸橋次著の『大漢和辞典』によると、春秋時代の歴史書である『國語』の中の晋語の「今土木勝」がもっとも古い出典とされている。その後の中国文献には『後漢書』に「土木宮建」、『列子』に「禾稼土木」等とあるが、いずれも現在の家屋敷をつくること、つまり「建築」を意味する言葉である。さらに、唐代になると「掌土木工匠之政、掌城池土木之役」あるいは宋代に「凡土木工之制」等、建築的要素が強いものの土木の意味も含む言葉となった。中国の『春秋左氏伝』等古い文献では「土功」という言葉が使われているが「土」と「同義語として使われているが、日本でも出典は少ないものの「普請」という言葉が定着するまで使われた例があり、昭和時代になっても「視向土功組合」等として用いられている例もある。 わが国で「土木」という言葉が使われたのは平安末期、この時代に橘忠兼が編集した古代国語辞書である『色葉字類抄』に「土木、技芸、トボク、工匠又造作名也」とある。文献に現れた例として、権大納言藤原行成の日記『権記』の中の 1002 年の記事に「不費土木之方力」とある。また『兵範記』、『吾妻鏡』にも現れ、鴨長明(作)方丈記にも「土木のおずらい」等と土木が出てくるが、いずれも家づくり、つまり建築という言葉と同義である。さらに鎌倉時代以後に仏教語から出てきた「普請」という言葉が土木と同義語として江戸末期まで使われてきた。幕末、堀保己一人などにより編纂された『武家名目抄』に「普請、作事の説明に土木といふ言葉が使われている。明治新政府は 1870 年土木司を置いたのが土木という言葉の復活であり、これまで使われてきた普請に代って土木という言葉が定着していった。その後、土木改名論がたびたびあったが代るべき言葉が見あたらず今日に至っている。

日本国語大辞典 第二版(2002 年、小学館)は見出し語 50 万項目、用例 100 万例

ど・ぼく【土木】[名] (古くは「どぶく」とも)

①土と木。比喩的に、飾らない粗野で素朴なものをいう。→ 形骸(けいがい)を土木にす。
*大観本謡曲・谷行(1546頃)「谷行に飛びかいて、上に蓋へる土木盤石、押し倒し取り払って」
*浄瑠璃・曾我扇八景(1711頃)上「内に土木の氣をやしなひて、外青黄の色なく」
*近世紀聞(1875-81)〈染崎延房〉四・二「貴族のおん身にて土木(ドボク)と共に朽果てんとは」

②木材、鉄材、土石などを使ってする建物、道路河川、港湾などの工事。土木工事。
*権記-長保四年(1002)三月一九日「仍营造之間、重制過差、不費土木之巧力、可減柱梁之高大」
*江都督納言順文集(平安後)一・白河院北斗曼荼羅堂「土木尽美。成之不已」
*兵範記-久安五年(1149)一〇月二五日「去夏企土木、其巧速終、今日被遣供養」
*色葉字類抄(1177-81)「土木 技芸 トボク 工匠分 又造作名也」
*正法眼蔵(1231-53)行持下「庵艸すみやかならず、土木いとなまず」
*青春(1905-06)＜小栗風葉＞春・七「何か土木の事から県民の大反対を受けたので、其れを見切時に官途を退いて」

辞書：色葉・言海

ど・ぼく・か【土木家】[名] 土木工事の計画・設計や監督などを業とする人。
*地図(1934)＜阿部知二＞「ときには大土木家になって、大運河を造ったり、難工の鉄道を完成したり」

ど・ぼく・がく【土木学】[名] 土木工事に関する問題を研究する学問。
*一国の首都(1899)＜幸田露伴＞「土木学の進歩も無理なる要求には酬ひがたかるべければまた如何とすべからざる也。もし強て廉価なる道路改良の法を求めば、凡ての車と牛馬とを廃せしむべきのみ」

ど・ぼく・ぎょう【土木業】[名] 土木工事に関係のある職業。
*遅すぎた日記(1954)＜長与善郎＞マニラの停戦協定に思ふ・八月二三日「アメリカでは日本の土木業とその用具の原始的であるのに驚き」

ど・ぼく・けんちく【土木建築】[名] 土石、木材、鉄材などを使って建物、道路などをつくる工事。土建。
ど・ぼく・こうがく【土木工学】[名] 道路・河川・港湾・上下水道や国土開発、都市計画などの施設に関する土木技術の問題を研究する工学の一部門。
*工学字彙(1886)＜野村龍太郎＞「Civil engineering 土木工学」

ど・ぼく・こうじ【土木工事】[名] 土石、木材、鉄材などを使ってする道路、河川、港湾などの工事。
*内務省官制(明治三十一年)(1898)七条「本省直轄の土木工事に関する事項」
*温泉宿(1929-30)＜川端康成＞秋深き・二「彼は土木工事のある土地から土地へ流れ歩いて」

ど・ぼく・の・へん【土木の変】一四四九年、明の英宗が、モンゴルのオイラート部の長エセンの軍と河北省の土木堡で戦い、大敗してとらわれた事件。翌年和議が成立、帝は送還された。

ど・ぼく・ひ【土木費】[名] 土木工事のための費用。
*雪中梅(1886)＜末広鉄腸＞下・二「土木費の増加するには県民も困却して居様ですが」

ど・ぼく・や【土木屋】[名] 木材、鉄材、土、石などを使って建物、道路、河川などの工事をすることを業とする人。
*水の葬列(1967)＜吉村昭＞「要するに失神してぶっ倒れた野上は労働者たちにとって、土木屋じゃねえ、というわけなのだ」

けん・ちく【建築】[名] 土、木材、金属、石などで家屋、橋梁などを建て築くこと。また、そのようにして建てた物。作事。普請。
*日本風俗備考(1818頃)二「太閤の改政以後は、江戸の建築極めて壮大にして」
*花柳春話(1878-79)＜織田純一郎訳＞「此家曾て豪商が愛妾の為に建築する所に係り」
——か【建築家】建築物の設計および工事の監督などを業とする人。建築師。(和蘭学制(1869))
——がく【建築学】建築に関する事柄を研究する学問。明治初期に造家学といった。〔慶応再版英和对訳辞書(1867)〕

土木学会 新土木図書館・会館記念式典 記念講演 丹保憲仁会長「土木工学から環境土木工学へ」2002年5月13日、土木学会誌 2002年8月号

「土木」という言葉の語源となったのが『淮南子（えなんじ）』という本であります。紀元前2世紀ごろの本だと思いますが、その13巻にこんなことが書いてあります。

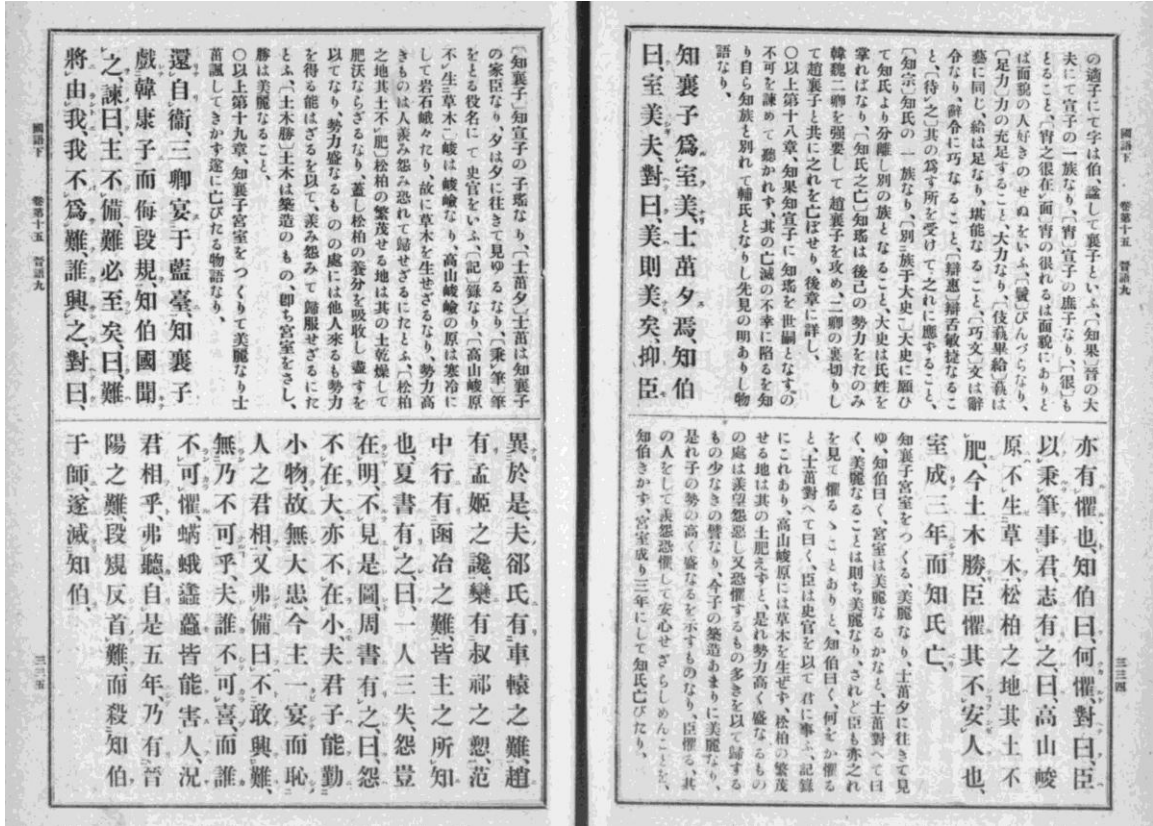
「古者民澤處復穴，冬日則不勝霜雪霧露，夏日則不勝暑熱蚊虻。聖人乃作，為之築土構木，以為室屋，上棟下宇，以蔽風雨，以避寒暑，而百姓安之。」

（古者（いにしえ）は民，澤處し復穴し，冬日は則ち霜雪霧露に勝（た）えず，夏日は則ち暑熱蚊虻（ぶんぼう）に勝（た）えず，聖人乃（すなわ）ち作（おこ）り，之（これ）が為（ため）に土を築き木を構へて，以（もつ）て室屋と為（な）し，棟を上にし宇（う）を下にして，以（もつ）て寒暑を避けし，而（し）こゝして百姓之（これ）に安（やす）す）
――『楠山春樹：淮南子（中） 明治書院』

ここに記載されている『築土構木』という言葉，これを明治時代の先人が詰めて「土木」として，われわれのグループの名前にされたわけです。

〔春秋〕紀元前5世紀「国語・晋語九」「今土木勝、臣懼其不安人也」

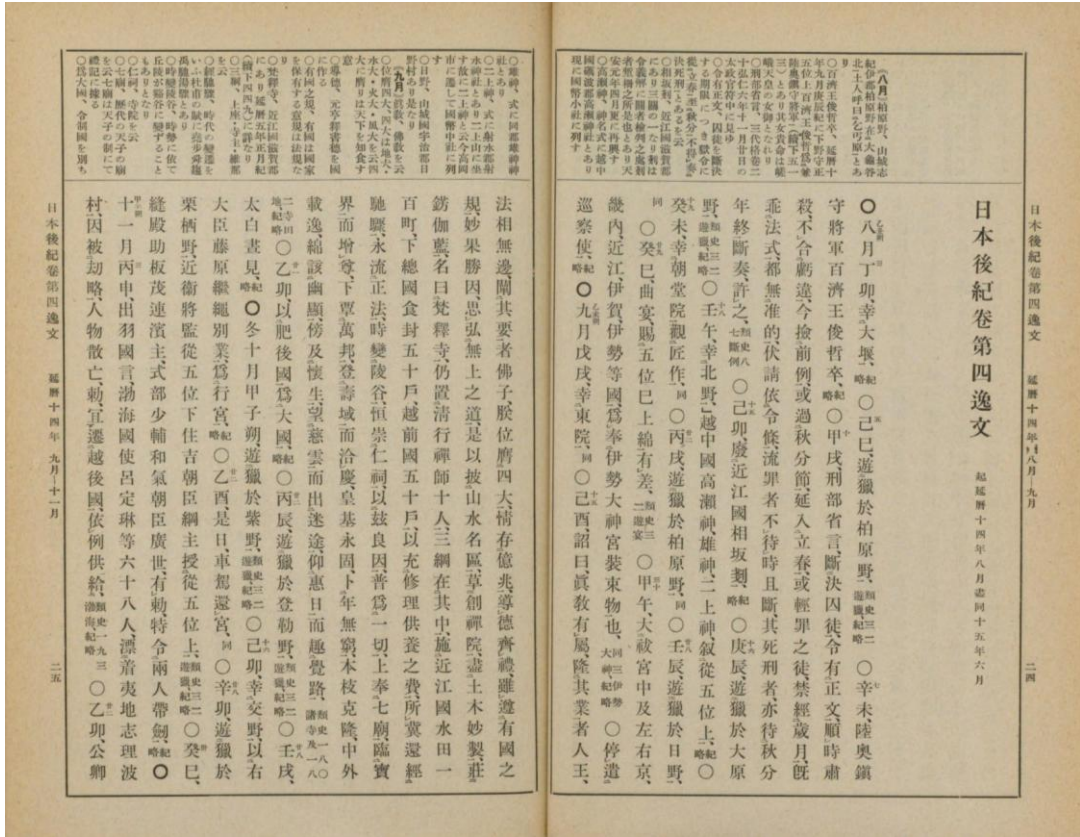
http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/941444/171 漢籍国字解全書：先哲遺著追補 第42巻



〔平安〕795 年:「日本後紀」(日本後紀は承和 7 年(840 年)に完成)“盡土木妙製、装銚伽藍”

日本後紀巻第四逸文 延暦十四年(七九五)九月己酉十五

http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1172439/25 増補六国史巻六(日本後紀 巻下)、佐伯有義、1946 年、朝日新聞社



十五日。天皇が次のように詔りした。

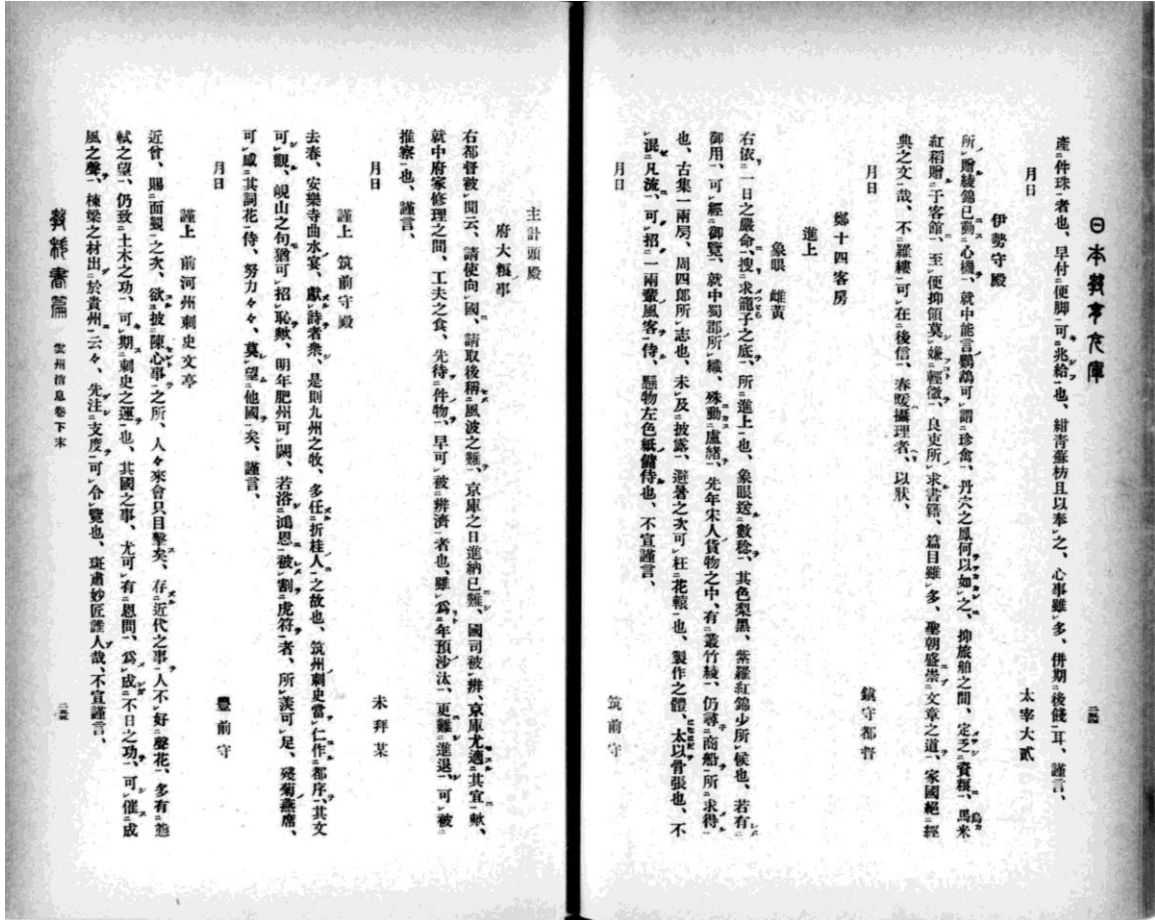
真実の教えである仏教には支えとなるものが伴うもので、それを興隆するのは国王である。万物の相状についての仏教の教えには限りがなく、その要諦を明らかにするのは僧侶である。朕は天下を治め、多くの民に思いを馳せ、徳と礼で導き整え、治国の規範に従ってきているが、さらに仏の果法とよき因縁を示しているところのこのうえなく勝れている仏教の教えを広めようと思っている。そこで、景勝の地を開いて仏寺を創建し、土木の妙を尽くして伽藍の装飾を行い、寺名を梵釈寺とし、清行の禪師(禪行に通じた僧侶)十人を置き、寺役人である三剛は禪師の中から任ずることにした。そして、近江国の水田百町と下総国の食封五十戸・越前国の食封五十戸を施入し、寺の修理と供養の費用に充てた。願わくは、時が経過しても永く

正しい仏教の教えを伝え、丘陵や溪谷の地形が変わるほどの時間が経っても、人々が寺を崇めることを。この寺院創建が良因となって、上は皇祖霊のいる宝界(浄土)が尊さを増し、下は仏教の教えが全国に及び、よく治まり、すべてが喜ばしくなろう。天皇の事業の基礎が永く固められ、代は永続し、皇室の本宗も別れた枝族もよく栄え、内外共に安楽で冥界も現世も長く幸福となり、それがすべての人々に及び、慈しみの雲を見つつ迷いの世を出て、日光のような仏教の智慧を仰ぎ、悟りの道を進むことになろう。

(現代語訳は、日本後紀(上)全現代語訳、pp.90-91、森田梯、2006 年、講談社学術文庫)

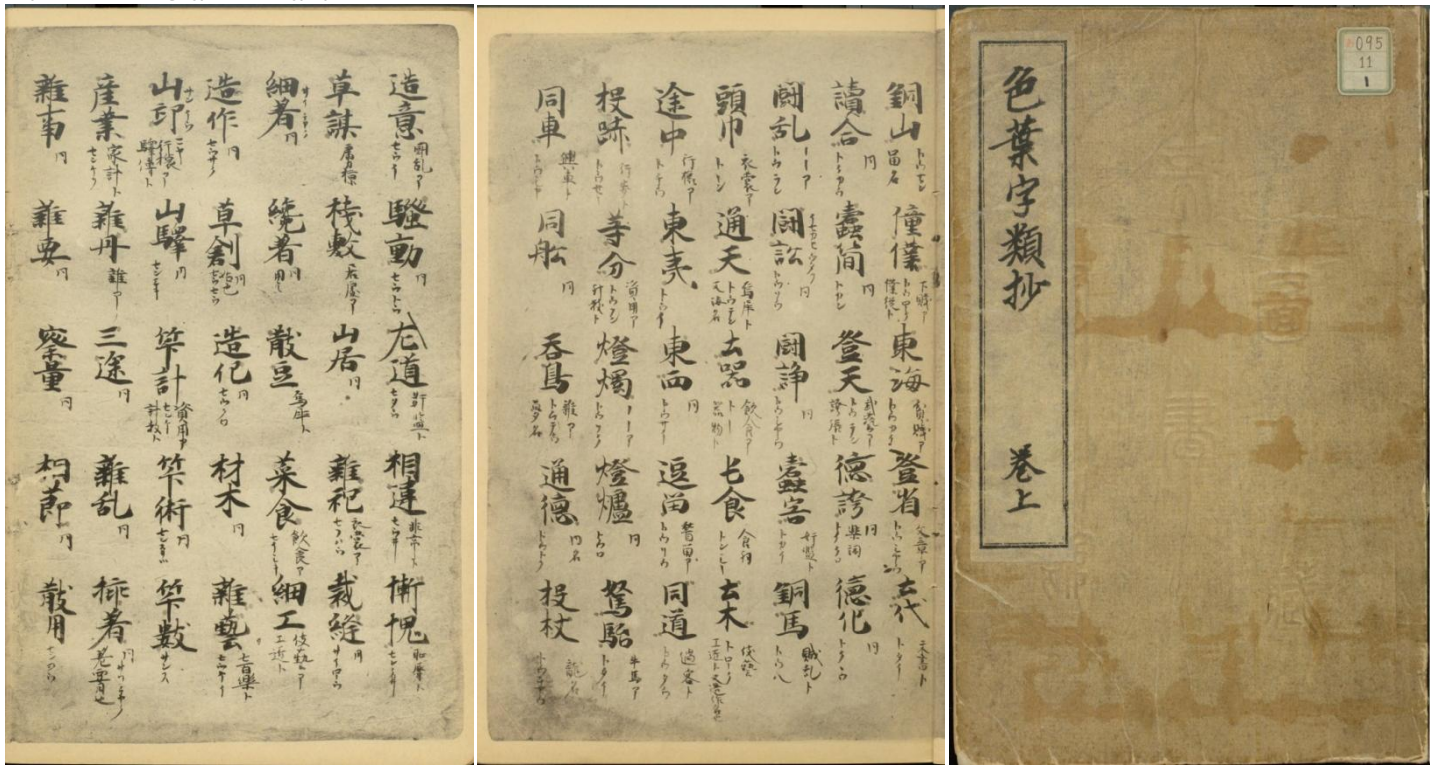
〔平安〕1066 年頃:「明衡往来(藤原明衡)」“多有態軾之望、仍致土木之功、可期刺史之運也”

http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1708814/150 日本教育文庫 教科書篇 雲州消息 巻下末



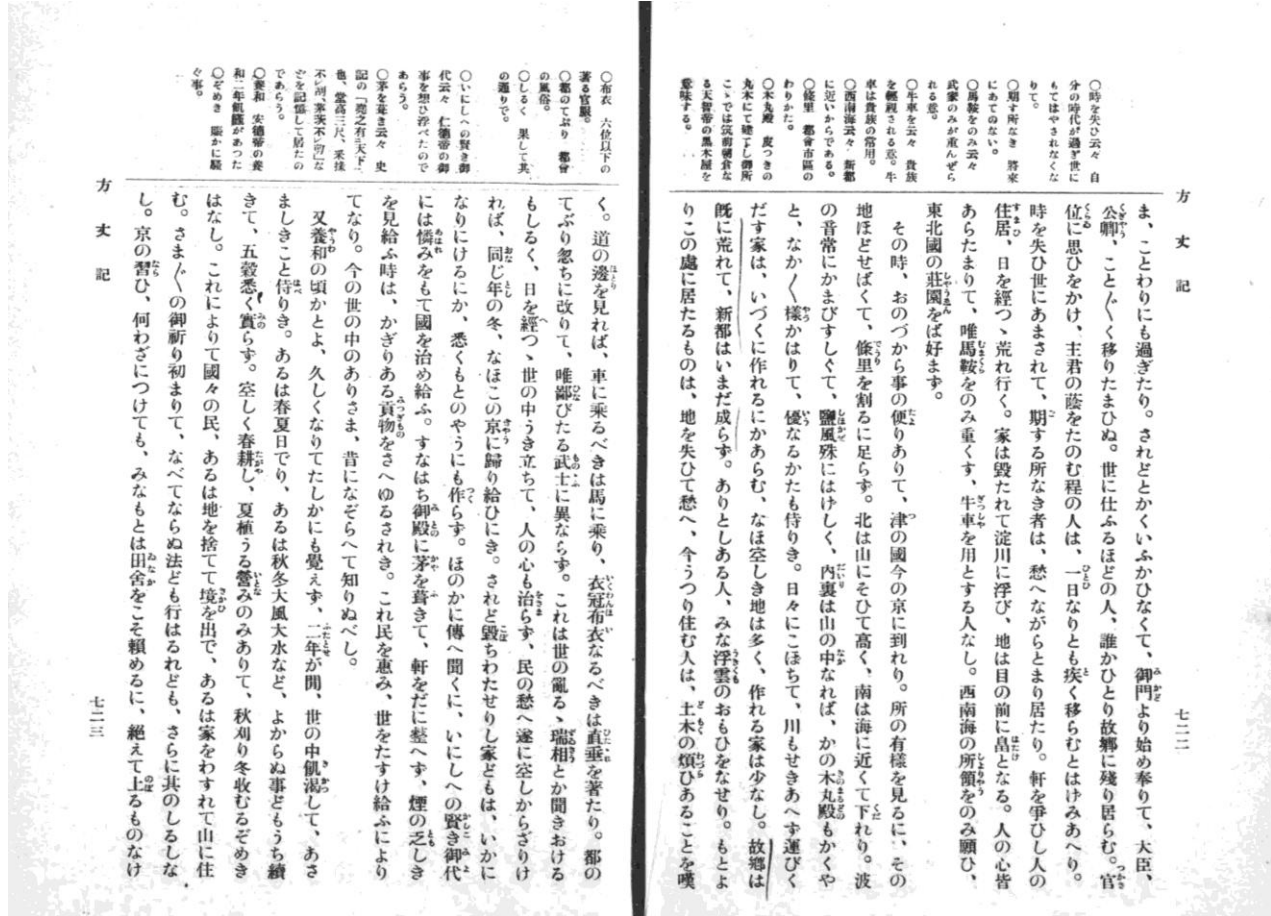
〔平安〕1165 年頃:「色葉字類抄」“土木 技芸 トホク 工匠 又造作名也”“造作 セウサク”

http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182105/66 色葉字類抄：尊経閣叢刊丙寅本、巻上



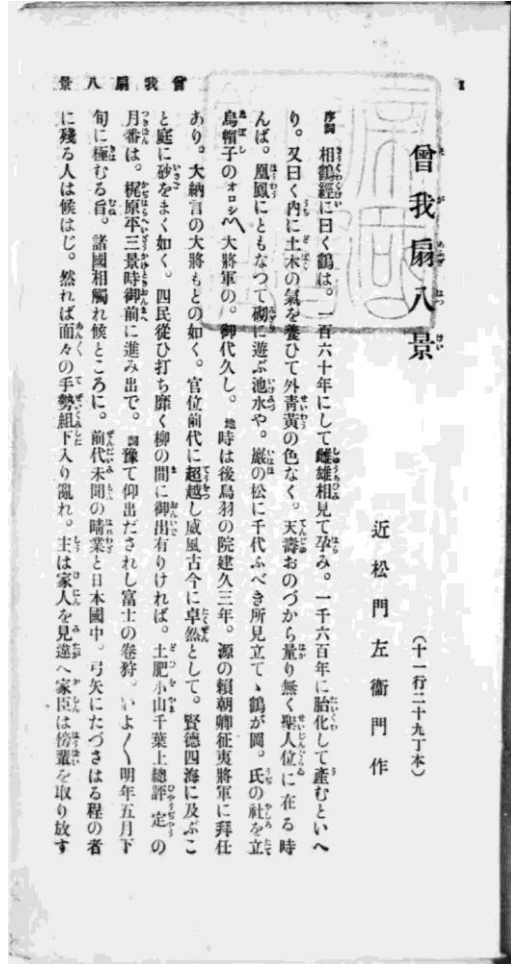
〔鎌倉〕1212 年:「方丈記(鴨長明)」「土木のわづらひあることをなげく」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1018057/420> 校註日本文学大系第三巻(方丈記)、1925 年、国民図書



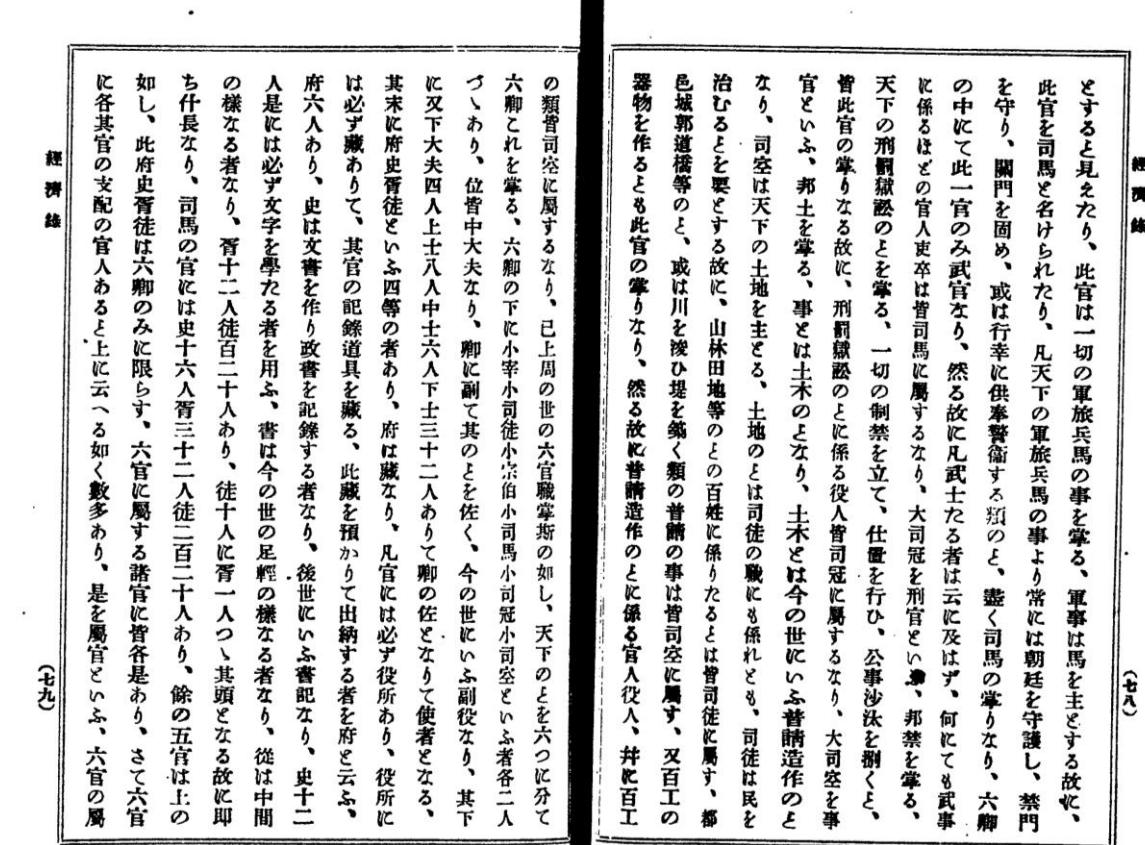
〔江戸・宝永〕1709 年:「曾我扇八景(近松門左衛門)」「内に土木の気を養ひて、外青黄の色なく」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/970015/5> 近松門左衛門全集、第 5 巻



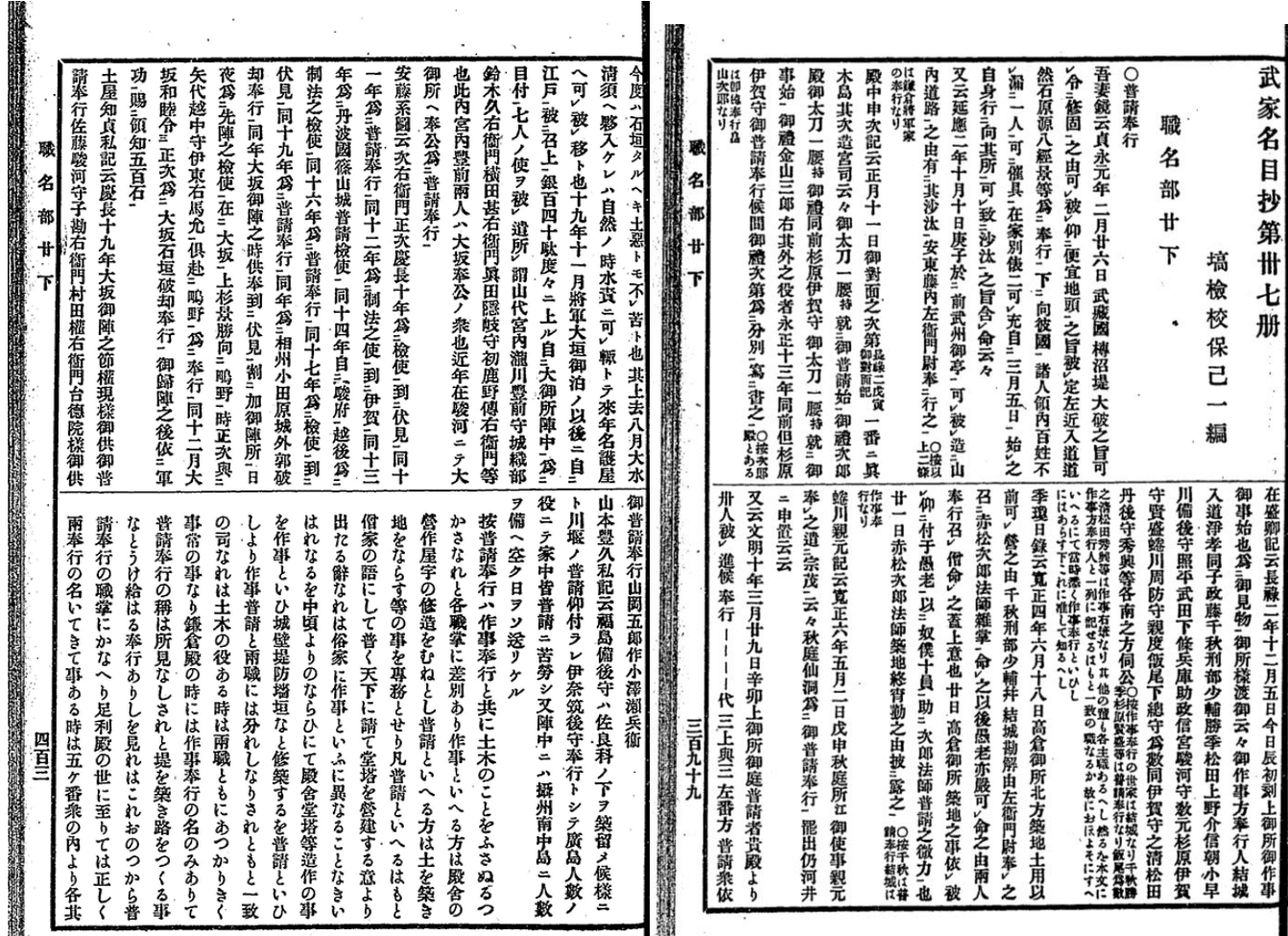
〔江戸・享保〕1729 年:「経済録(太宰春台)」「土木トハ、今ノ世ニイフ普請、造作ノコト也」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/799312/50>



〔江戸・万延〕1860 年:「武家名目抄(塙保己一)」作事奉行、普請奉行等に「土木のこと」「土木の役」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/771968/34> 故実叢書、武家名目抄(塙保己一)

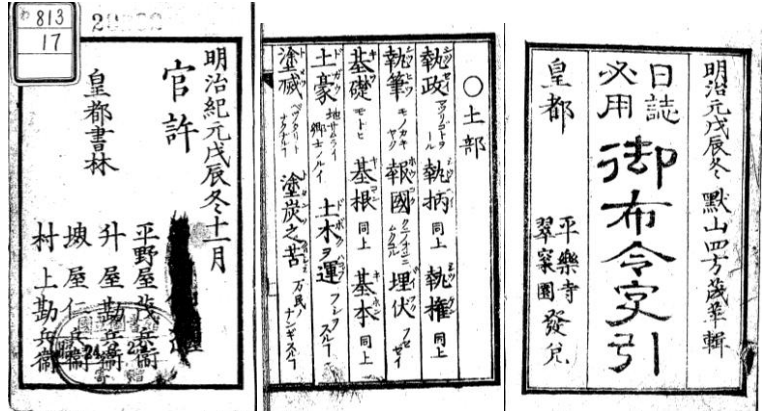


〔慶應 4 年 6 月〕1868 年 6 月:「新令字解(荻田嘯)」大阪版“土木(トボク) フシンヲスルコト”



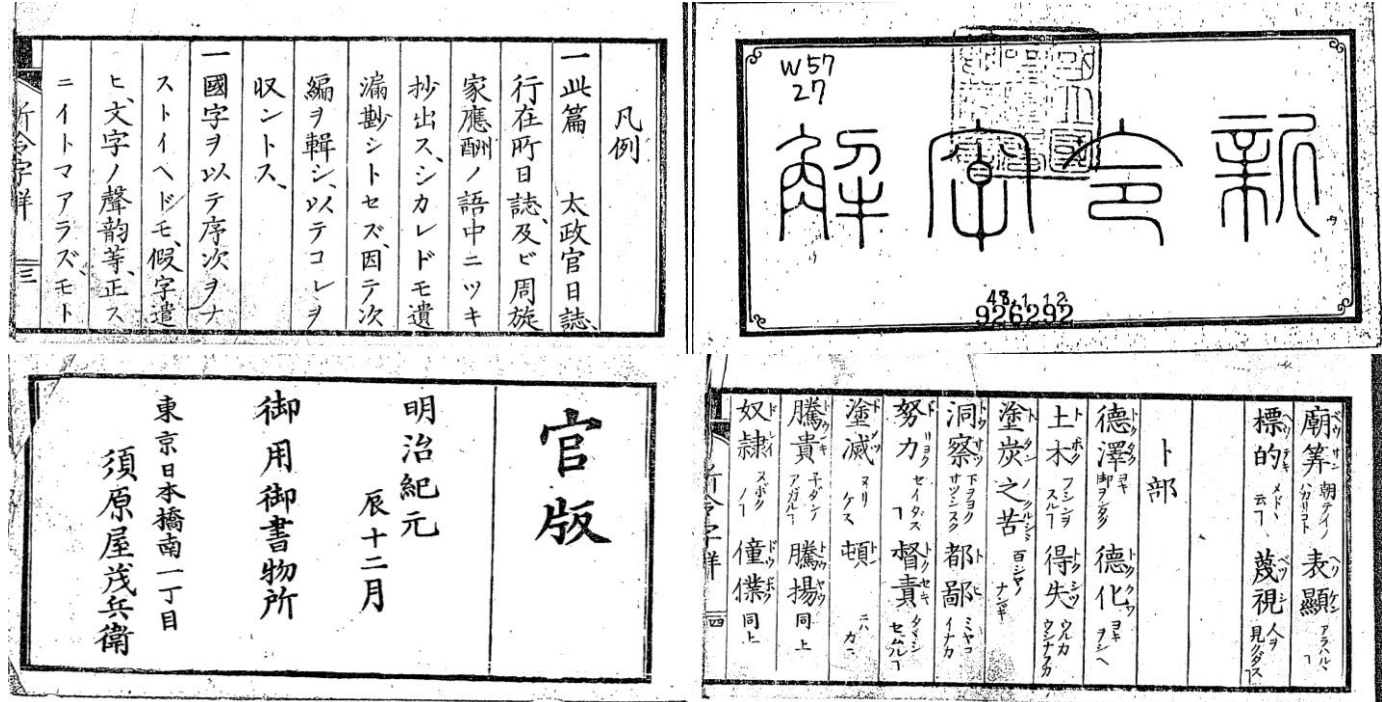
〔明治元年〕1868 年 11 月:「日誌必用御布令字引(四方茂平)」“土木(ドボク)ヲ運(ハコブ) フシヲスルコト”

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785803/17>



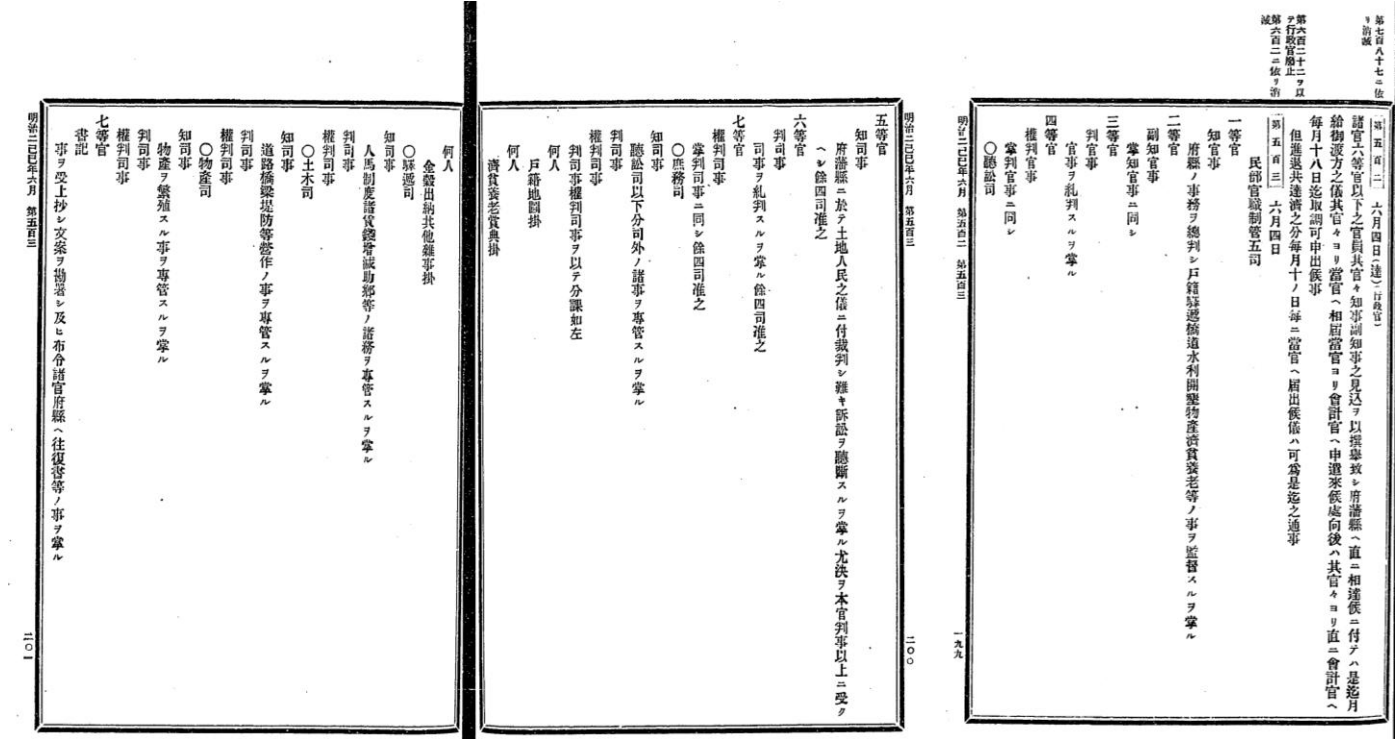
〔明治元年 12 月〕1868 年 12 月:「新令字解(荻田嘯)」東京版“土木(トボク) フシンヲスルコト”

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994593/8>



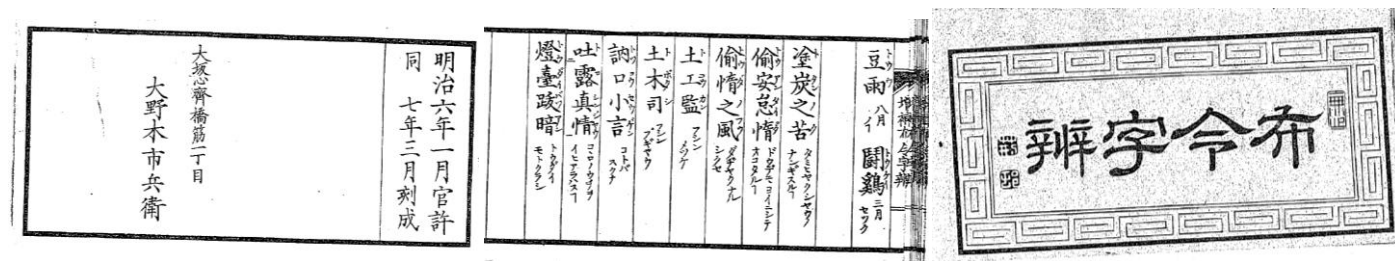
〔明治 2 年〕1869 年:民部官職制「土木司」「道路橋梁堤防等営作ノ事ヲ専管スルヲ掌ル」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787949/136> 法令全書. 明治2年



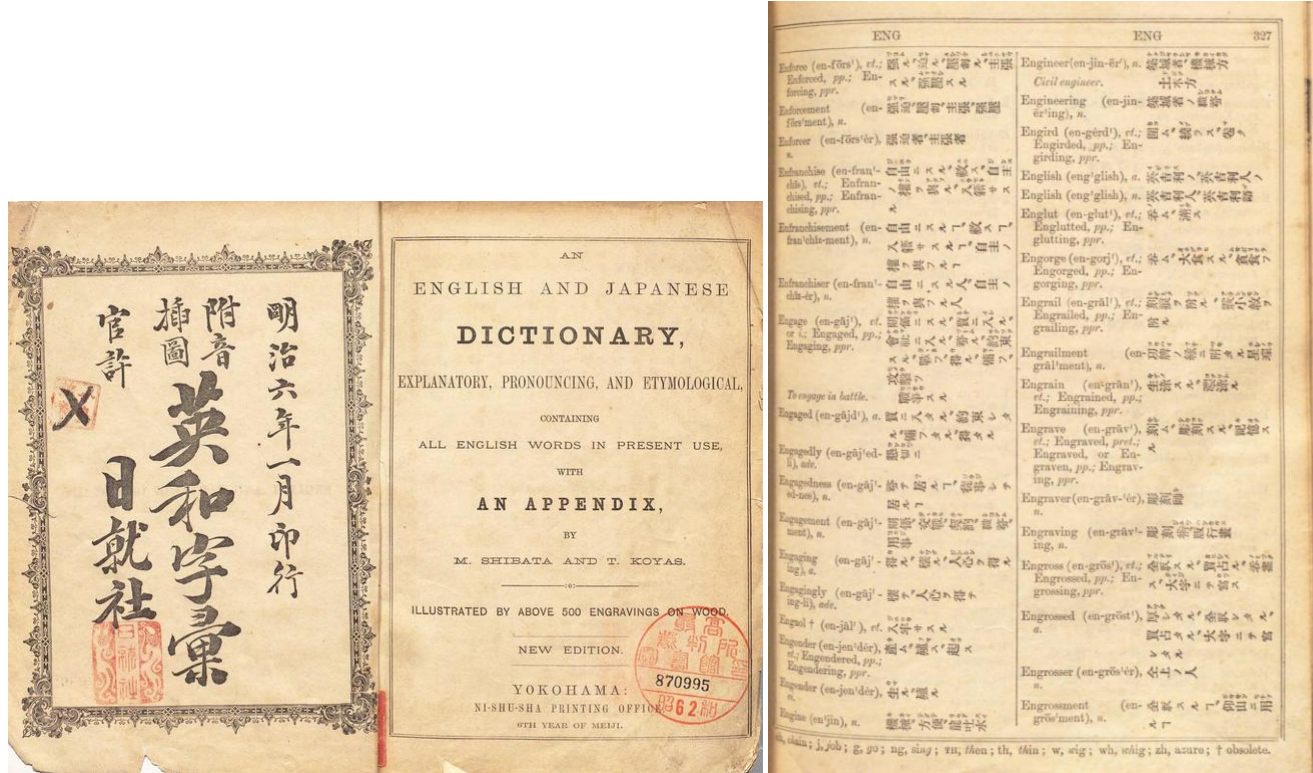
〔明治 6 年〕1874 年:「増補布令字弁(荻田長三)」“土木司 フシンプギヤウ”

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/785978/38>

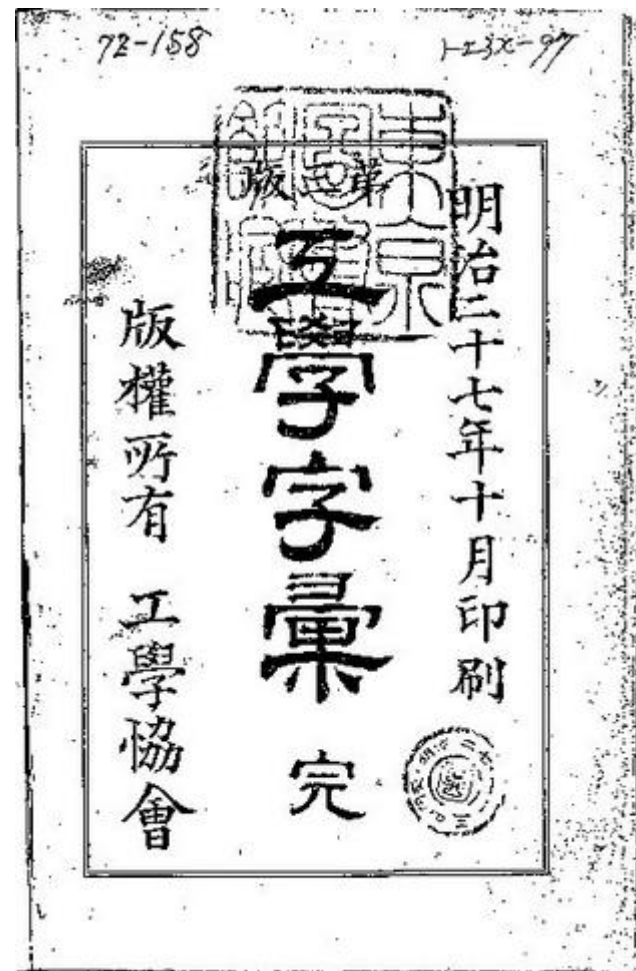


〔明治 6 年〕1873 年:「附音挿図英和字彙(柴田昌吉)」“Civil engineer 土木(ドボク)方”

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2938261/170>



<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1083974/28>



ENG — ENG		49
Marine engine.	船用汽機	
Monkey "	跳猴式汽機	
Noncondensing "	不凝汽機	
Oscillating "	搖擺汽機	
Pile driving "	打樁機	
Portable "	易搬汽機	
Powder. "	硝彈機關	
Reciprocating "	往復式汽機	
Reversible "	反角汽機	
Ringing "	鑼下打式機	
Rotary "	迴旋汽機	
Side lever "	側槓汽機	
Single acting "	單動汽機	
Stationary "	定置汽機	
Steam "	汽機	
Trunk "	管柱汽機	
Vertical "	豎立汽機	
Water pressure "	水壓機關	
Winding "	起重機	
Engineer.	工程師	
Civil engineer.	土木工程師	
Mechanical ,,	機械工程師	
Engineering.	工學	
Civil engineering.	土木工程	
Electric "	電氣工程	

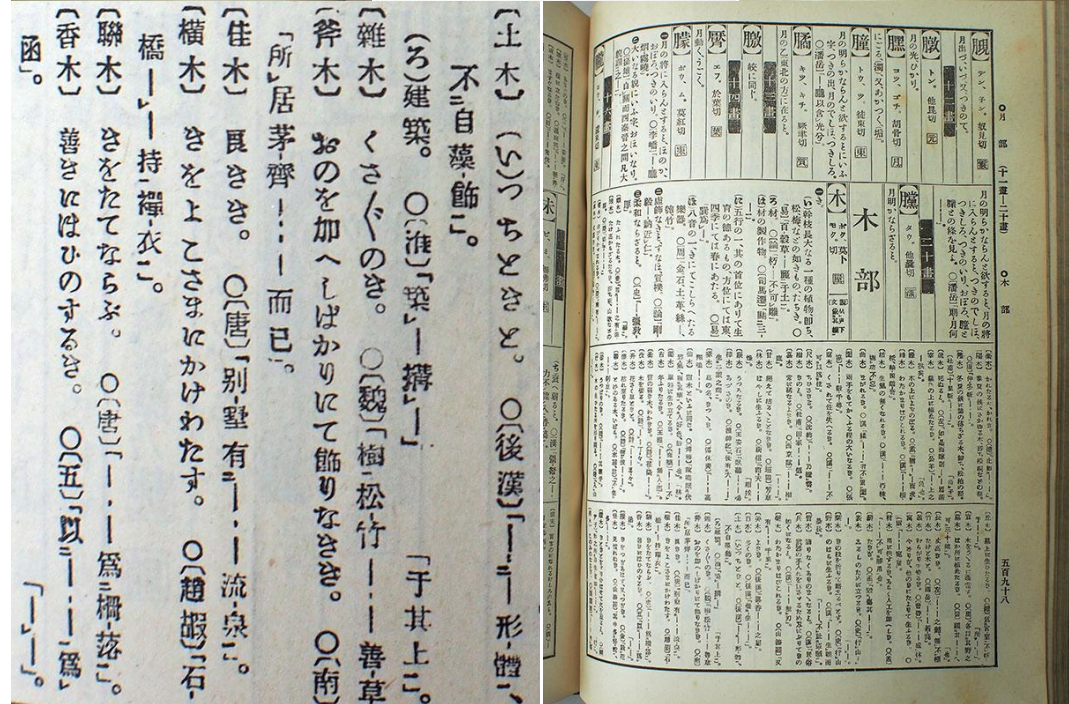
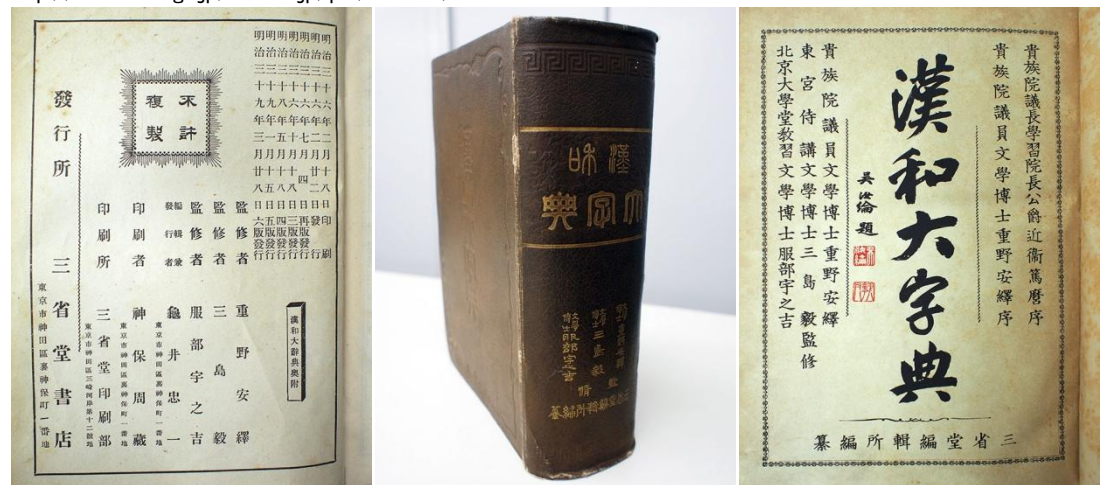
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902745/93>



とほり (174) とせ

A travelling merchant. まはりては(名) 通行・通商・往來・客商・通行者・旅行家、是れはてがた A passport. まはる(名) 通、徹、ぬける、いかりこと、通行、通過、ゆきする、うきゆく To go through; to pass; to pass by or through; to succeed. まばう(名) 馬、鹿、鹿、鹿、鹿、さむか、かぜ A deer. まはつち(名) 高祖母(曾祖母の母) Great, great grandmother. まはつちぢ(名) 高祖父(曾祖父の父) Great great grandfather. まはつちや 庭邊、免組、佃先、むかしのおや Remote ancestor. まはなび 遊樂、遊園、はなはな、あそび Far off; ocean. まはう(名) 土封、つかまふつきや A mound; an artificial mound. まほう(名) 土師、じぶら、あなばち、ゆるばち(動物) A wasp. まほう(る) 土層、つちのへでこ(づる) To be broken as a wall of fort. まほうくわい 土窟(洞窟)、(てんやぶるる(圓窓)等) Utter void; to be entirely broken. まほう(る) 庭邊(庭邊に居て乗る(事) Riding to a great distance). まはの(名) 庭邊、よはしりす、まはざる To keep one's self back; to retire. まぼく(名) 奴隷(木匠、いともへ Sorvants, black men). 土工、工事、よしん Works, public works. まぼく(名) 戸外口、さといへい The entrance, door. まぼく(名) 土木科、工事業、よしんぐわひて A building, an architect. まはや(名) 遠矢、是れはよりいるや Shooting from a great distance. まはや(名) 遠山(山) Tiyama (a family name). まはや(名) 遙隔、遠隔、是れはよるること、よはさることを Indirect hind; indirect. まはやく(名) 遙隔不知、しづはれる、停路、うつろふ、鳴、はせる To dissimulate; to feign. まはやく(名) 作者、うつろひ、遊藝者、ははれるもの A dissimulator, one who feigns. まはある(名) 庭邊(岸邊の水の淺きをいふ) Shallow to a great extent (as the sea near the shore).	(above) まはる(名) 遠、遠隔、是れはよる或しりす; 庭邊、道、是れはよるもの To keep one's self at a distance, not to come near, not to associate with; to be widely separated. まはる(る) 庭、遠隔、是れはよる或しりす To keep at a distance; to alienate. まはる(形) 遠、はるかに、庭邊、修遠 Far, off, remote, distant. まはる(名) 社交、はるなる(動物) The name of a fish. まはる(名) 庭邊、庭、はるかはれたる(庭) A remota country or province. まはる(名) 庭邊、庭邊、千里眼、是れはよくうつ A telescope. まはる(名) 庭邊、庭邊、是れはよるること、又もの、内視鏡 A distant view, a spy. まはる(名) 庭邊、あらはるる(米穀等を誇ふ) A coarse sieve. まはる(名) 庭、是れはよること、(四) 皆替、たえず Act of passing through; always. まはる(名) 庭邊、もやすること(燈臺等) Burning; lighting. まはる(る) 庭邊(煙火をいふ) あかりのあまら A bonfire. まはる(名) 庭邊、えど、はるかに、おきてなき Desistant, lonely. まはる(る) 庭、暗闇に入らずに穴を穿つこと、まはる A round drill. まはるは 十重塔、是れはさねたかね The folds or turret of a stupa. まはる(る) 庭邊、光線、煙囪(動物) A kind of shell-fish. まはる(名) 海岸花、石南、石菖、荳蔻、梓(植物) The name of a tree. まはる(名) 土庫、つかはる土、土倉、土庫、土庫 On earth. まはる(名) 土庫(庭邊の地帯等を謂ふ) Arena or ring made of earth bags. まはる(名) 御伽子、偶合子、はやりのなまもの A musical instrument. まへん(名) 扶輪、かたは、てん(這)の頭 An importer. まへん(名) 庭邊、胡、胡、はるなるや Father. まへん(名) 海狗、海狗に似たる海狗(動物) A walrus. まへん(名) 大足、つまず、はて The end, final issue.
---	---

(い) はに はに はに はに はに (は) おは おは おは おは おは



〔大正8年〕1919年:「大日本国語辞典(松井簡治)」“1. つちと木と。【曾我扇八景上「内に土木の気を養ひて、外青黄の色なく」】2. 道路・堤防・鉄道・橋梁等に関する工事。土木工事。”

